

コリャード著『羅西日対訳辞書』のティルデ表記について

成 晴 慶

キーワード：コリャード著『羅西日対訳辞書』ティルデのマーク (~) 「濁音前鼻音」ティル
デマークの有無 ゆれ

1. はじめに

中世のキリシタン資料のうち、濁音の前に鼻音的要素が存在したというロドリゲスの記述があるが、当時の濁音前鼻音的要素を示すティルデのマークはドミニコ会のコリャードの著書に多く見られる。コリャード著書としては、『日本文典』(1632刊)をはじめ、『懺悔録』(1632刊)『羅西日対訳辞書』(1632刊)、コリャードの自筆稿本である『西日辞書』(1631刊)が知られる⁽¹⁾。これらのコリャードの辞書には当時の日本語の濁音前鼻音やアクセントなどが多く示されており、当時の音声の状態を知る上で大いに参考になると思われる。

しかし、コリャードの著書に対する評価は、彼の恣意的記述、訳語の雑駁などの点から資料としての信憑性についていろいろ言われているが⁽²⁾、濁音前鼻音要素の表記がなされている数少ない資料であるため、本稿では、この鼻音要素を表記していると考えられるティルデの性格について検討してみようとする。

この目的のため、キリシタン資料のうち、『羅西日対訳辞書』を中心にして濁音前鼻音的要素と思われるティルデのマーク(~ tilde)があらわれる環境を調査し、ティルデのマークの用法を明らかにしたい。また、それによって中世日本語の濁音前鼻音の状態について垣間みようと思う⁽³⁾。

以下の2節では『羅西日対訳辞書』のティルデのマークがどのような環境にあらわれるのかを統計的に調査するために、『羅西日対訳辞書』に掲げているティルデのマークの後の子音はどのような子音があらわれるのか、またティルデのマークの直後の母音はどの母音があらわれるのかを統計的に調査し、ティルデのマークが示されている母音の音環境を分析する。また、3節ではティルデのマークが記されている語や接辞など形態的な環境を分析し、ティルデのマークの性格を明らかにすると同時に、4節ではゆれを示す例により中世の濁音の前の鼻音的要素の状態を知ることが出来るのかどうかを検討する。

2. 『羅西日対訳辞書』のティルデのマークの統計的な調査

中世日本語には濁音の前の母音に鼻音的要素が存在したということはポルトガル人宣教師、ロドリゲスによって、はじめて言及された。彼は当時の日本語の実態について著した『日本大文典』には、当時の濁音の前の鼻音についての論述が次のように見られる⁽⁴⁾。

D, D z, Gの前の母音に関する第三則

○D・D z・Gの前のあらゆる母音は、常に半分の鼻音かソンソネーテかを伴ってゐるやうに発音される。即ち、鼻の中で作られて幾分か鼻音の性質を持ってゐる発音なのである。例へば、Māda (未だ), Mídō (御堂), mādōi (惑ひ), nādame (宥め), nādete (撫でて), nído (二度), mādzu (先づ),

āgiuai (味はひ), āguru (上ぐる), āgaqu (足掻く), cága (加賀), fanafáda (甚だ), fágama (羽釜) など。

○この法則は、ある場合にBの前の母音Aを支配することがある。それは Mairisorofaba (参りそろはば) のやうに、主としてFが重複して、そのFがBに変わる場合であるが、一般的なものではない。

このように、ロドリゲスは、中世末期の日本語において、「ガ」・「ダ」行の前の母音が鼻音化する現象と、Bの前の母音にも時として鼻音化が生ずると述べている。橋本進吉氏は、早くから、ロドリゲスの記述を掲げて、濁音の前の鼻音的要素の存在は、古いものではないかと推定している⁽⁵⁾。ロドリゲスの上の記述に従えば、中世末期の日本語の語中語尾の「ガ」・「ダ」行音（時にはバ行音）の前に、鼻音的要素が存在したことになる⁽⁶⁾。

コリヤードも濁音前鼻音的要素と思われるティルデのマークについて著書『日本文典』で次のように述べている⁽⁷⁾。

母音字のうち、その上に～印があるときには恰もnのやうに引き延ばされねばならぬ。但し元のままの音で引き延ばすのではなく速かに且つ穩かに引き延ばされるのである。例え
ば ^{ワ～ガ} vāga

これらの記述を踏まえながら、ここでは、中世キリシタン資料のうち、濁音の前の鼻音的要素として見なされるティルデの表示（[~]）が最も多く示されているコリヤードの文献、なかでも『羅西日対訳辞書』を中心に統計的に分析することにする。『羅西日対訳辞書』のティルデのマークを見てみると、以下で示すやうに濁音の前の母音にティルデのマークが表示されているものだけではなく、濁音の前の母音にもかかわらず、ティルデのマークが表示されていないものも見られる⁽⁸⁾。

(1) 濁音の前の母音にティルデのマークが表示されているもの

- mēzz urāxī gari (珍らしがり) (p 7)
- chūni āgari:u (宙に上がり, る) (p 7)
- namida vo nāgaxi:u (涙を流し, す) (p 69)
- mēga sāme:uru (目が覚め, うる) (p 153)
- curūmano fiqībāri (車の引き針) (p 155)

(2) 濁音の前の母音にティルデのマークが表されていないもの

- naguèqi:u (嘆き, く) (p 11)
- nāmida vo vofaie:uru (涙を抑え, うる) (p 33)
- taibio ni vocafare:uru (大病に犯され, うる) (p 63)
- cazari (飾り) (p 94)
- ibiqi vo caqi (軒をかき) (p 128)

『羅西日対訳辞書』の全体の濁音前の母音⁽⁹⁾にティルデのマーク(～濁音前鼻音)が付いているものと、付いていないものを後ろにくる子音別⁽¹⁰⁾に統計的な分類をすると次の表の通りである。

1) ティルデのマーク(鼻音的要素)があるもの							
後ろにくる子音	～g	～b	～d	～z	～z z	～j	その他
数	693	68	252	15	127	3	63
2) ティルデのマーク(鼻音的要素)がないもの							
後ろにくる子音	～g	～b	～d	～z	～z z	～j	
数	73	234	56	84	11	75	

この表を見る限りでは、ロドリゲスが『日本大文典』で記述したように、「ガ」行と「ダ」行の前の母音に最もティルデのマークが多く見られ、その次に「バ」行の順になっている。しかし、ロドリゲスに言及されていない「ザ」行のものも少しながら見られる。上の表を見ると、すべての環境でティルデのマークが付いているものと付いていないものが両方あって、ロドリゲスの記述のようにガ行とダ行はすべてティルデが付く、「バ」行は例外的にティルデが付くとは必ずしも言えない。

また、『羅西日対訳辞書』に記されているティルデのマークがあるものの直後の母音を統計

的に調べると次のようになる⁽¹¹⁾。

～母音	～ a	～ i	～ u	～ e	～ o	～ u e	～ u i	～ u a
数	393	52	187	37	227	100	128	6

この表は、ティルデがあらわれるものの直後の母音別に統計を出したものである。音環境としては、広母音であればあるほど鼻音の発音がしやすいと予想されるが、上の表の統計は、広母音「a」「o」にティルデが少し多い傾向を見せている。一方、狭母音「i」「e」は少ない。しかし、「u」は意外に多く見られる。予想外に「u」にティルデが多くあらわれているのは、「u」が後舌母音であるからかもしれない。ただ、全体としては予想とそれほどかけはなれた傾向は見られない。

以上、コリャードの『羅西日対訳辞書』に記載されているティルデのマークを中心に統計的な調査を行った。

その結果、ロドリゲスの『日本大文典』で記されているのと異なり、「ガ」行・「ダ」行の前の母音に鼻音表示と言われるティルデのマークが多く見られ、その次に「バ」・「ザ」行にも少しながら見られることが分かった。

以下ではさらにティルデの形態的環境を分析することにする。

3. ティルデの形態論的環境

前節では『羅西日対訳辞書』の日本語のところにティルデの表記について統計的に調べてみた。しかし、ティルデの表記が同じ環境のもとでもティルデの表記が付いているものもあれば、付いていないものもかなり混じっている。著者コリャードは、ティルデのマークを主に濁音前鼻音を意図したものと見られるが、どのような基準でティルデのマークを付したのであろうか。また、ティルデのマークを付けられたものに見られるゆれはどのような性格のものかを、語や語尾などの形態論的環境を中心に調べて『羅西日対訳辞書』のティルデのマークの性格を分析することにする。

3-1. ティルテが付く語と語尾の分析

『羅西日対訳辞書』の日本語にティルデマークが付いているものと付いていないものを形態的に調べるとき、形態素と形態素の連結部、すなわち助詞の前、連濁などの環境を含めて調べることが重要である。

語彙によってティルデマークの有無に関係するかどうかをいくつかの単語から見てみることにする。

まず、次の「fodo」例を見てみることにする。

「fōdo」(程 p 146)

「sáruhōdoni」(さる程に p 59, p 121)

「icafōdo」(如何程 p 109)

「chicái fōdo」(近い程 p 132)

「nōgoi」(拭い p 133)

「axinōgoi」(足拭い p 73)

「tenōgoi」(手拭い p 73 p 173)

このように、「fodo (ほど)」は、単独で用いる場合、複合語として用いる場合、いずれも濁音「ど」の前には必ずティルデのマークが付いており、ティルデのマークが付いていないものは見られない⁽¹²⁾。

「nogui (拭い)」の場合は用例が「fodo (ほど)」よりは少ないが、「fodo (ほど)」と同じように単独で用いる場合や複合語で用いる場合いずれもティルデのマークが付いており、ティルデのマークを示していないものは見られない。

上の二つの用例とは逆であるが「voyobi (及び)」を見てみると次のようになる。

cocōro ni voyobi (心に及び p 123)

jefi ni voyobānu (是非に及ばぬ p 113)

voyobi (及び p 133)

この用例「voyobi (及び)」は 先の「fodo (ほど)」「nogui (ぬぐい)」とは逆である。「及び」は、単独で用いる場合でも、複合語で用いる場合でもティルデのマークが付されていない。これらを見ると、濁音の前の鼻音を持つ語彙と持たない語彙があったと考えることも出来るのではないだろうか。これが本当であれば、濁音前鼻音を持つものとそうではないものが Lexical に対立していたことも考えられる。もしそうであれば、このティルデは当時は語の区別に用いられたこともあるかも知れない。

同じく副助詞「nagara (ながら)」用例について調べると次のようになる。

nagāra (ながら p 7, p 42, p 42, p 124)

sānagara (さながら p 124)

iqi nagara (生きながら p 144)

この「ながら」の用例は6例すべてがティルデのマークが見られない。
しかし、音環境として、類似しているもの「nāgaxi」(流し p 40)「nōgaxi」(循し p 42, p 72)
「nāgue」(投げ p 106)「nāgueu ūchi」(投げうち p 58)「nāgue daxi」(投げ出し p 45) など
にはすべてにティルデのマークが付いている。

「ながら」は『羅西日対訳辞書』と同じくコリヤードの著書『懺悔録』にもティルデのマークが施されている用例は見つけれない。これらを見ると、これらのティルデのマークは、語によって決まっていたものと見られる。

次は連語の場合の濁音前のティルデマークはどうなっているのかを調べることにする。まずは原形「tocoro(ところ)」が語の後ろに付いて連濁を起こす場合はどうなるかを調べると次のようになる。

cacurē docoro (隠れ所 p 70)

sōxã docoro (奏者所 p 75)

「tocoro」は語の後ろに付いて連濁が起きて「docoro」になるが、この連濁形「docoro」の前の母音にはすべてティルデのマークが付されている。

この他、次の連濁の場合もティルデが見られる。

mācurã gami (枕上 p 19)

chīgimĩ gami (縮み髪 p 30)

firōbiro to (広々と p 45)

fāxibaxi (端々 p 133)

次には接辞にはティルデのマークと関連があるかどうかを調べることにする。

これらは接尾語でありながら、同時に連濁をともなう語である。まず、「dachi (だち)」には2つ(立ち・達)の意味があるが、この用例を掲げると次のようになる。

tçurēdachi (連れ立ち p 24)

momōdachi (股立ち p 79)

tomōdachi (友達 p 125)

yamādachi (山立ち p 141)

nacādachi (仲立ち・媒 p 151)

この接尾語「だち」を見ると、すべてがティルデのマークが示されており、ティルデのマークが示されていないものは見られない。「達」は接尾語であるが、「立ち」は動詞の連用形(名詞形)であり、両方とも連濁の現象である。

形容詞語幹に付いて動詞化する、接尾語「がり」が付く形「cavaĩgari (かわいがり p 23)」「xitãgari (したがり p 24)」などを調べると殆どティルデマークが付く形しか見られない。この他、接尾語として、「goro」(toxĩgoro (年頃 p 48), itçugõro (何時頃 p 109), chicãgoro (近頃 p 137)), 「goto」(ĩigoto (言い事 p 40), itazzurãgoto (従事 p 60), nivacãgoto (俄事 p 113), qiqĩgoto (聞事 p 114), nacãgoto (中言 p 120), bũtcuiaqi gõto vo nucaxi (ぶつやき言をぬかし p 85)) などが見られるが、「butcuiaqigoto」以外は、すべてがティルデのマークが示されている。

助詞が付く場合のティルデのマークは、どのように示されているのかも調べることにする。

ga

nozomĩga (望みが p 33)

farãga cudari (腹がくだり p 51)

amẽga furi (雨が降り p 102)

de

aburãde ãgue (油であげ p 52)

yarĩde tçũqi corõxi (槍で突き殺し p 70)

cachide (徒歩で p 98)

domo

narẽdomõ (なれども p 42)

guĩdõmo (儀ども p 114)

上で分析した格助詞「が」・「で」・「ども」にはすべてティルデが付いている。しかし、同じ環境でティルデマークが付いていないものも見られる。これには3-2で示す「figa sãfu :ocõro (陽がさすところ p 154)」「goxinrõ de gozãru (御辛勞でござる p 55)」のようなティルデのマーク付されていない例がある。3-2ではさらにティルデのマークが付されていない語や接辞についても論述する。

3-2. ティルデが付かない語と語尾の分析

いままではすべてティルデが付いている例について述べてきたが、例外なくすべてがティルデが付いているわけではない。それらの例を見てゆくことにする。

- fana gâmi (鼻紙 p20)
- farubâru (遙々 p37)
- nusubito (盗人 p71)
- chôzzubune (手水船 p74)
- caribunê (借り船 p86)
- vmabune (馬槽 p105)
- cocòrobucài (心深い p106)
- sâmazama (様々 p84)
- xinajina (品々 p37)

連濁形「バ」行は、ティルデのマークが付いているものより付いていないものがはるかに多い。「ザ」について言えば、用例が少ないものの、ティルデのマークが付いているものは見当たらず、付いていないもの「samazama」が2例見られる。

以上、連濁形について調べてみたが、連濁形の全体的な傾向としては、連濁の前の母音に、ティルデのマークが付いているものと付いていないものが両方見られるが、ティルデが付いていないものは、単語毎によってティルデのマークの有無が決定されているように見える。また、「バ」行と「ザ」行の前がほとんどである。

- côga itta (功がいった p13)
- funéga cacári (船がかかり p59 p86)
- figa sâfu tocòro (陽がさすところ p154)
- goxinrô de gozàru (御辛勞でござる p55)
- icabacâri (如何ばかり p110)
- fabacari (さばかり p139)
- core nomi narazu (これのみならず p88)
- nomi narazu (のみならず p88)
- fitocâta narazu (一方ならず p88)

「côga itta」「funéga cacari」のように開合やにアクセントなどの表示が付いているものには

ティルデのマークが付いていない。おそらく、開合やアクセントなどのような他の符号がある場合は、ティルデのマークより優先されたであろう。しかし、助詞「が (ga)」の前に唯一ティルデのマークが付されていないものが「補遺」のところに「figa sáfu tocôro」1例が見られる。格助詞「で」が連結する場合も「goxinrô de gozàru」の一例以外はすべてティルデのマークが付いている。すでに3-1で述べたように、接続助詞「ども」には、ティルデのマークがすべて付されているが、ここでの副助詞「ばかり」と打消し助動詞「ず」には逆にすべてティルデが付いていない。これは、助詞・助動詞も語によってティルデのマークが決まっているのではないかと思われる。語彙によって、ティルデマークが付く「バ」行と「ザ」行はゆれて消滅する過程を示すものであると思われる⁽¹³⁾。

もう一つの例「gozaru」について調べることにする。

- taxicanî gozaru (確かにござる p 27)
 xinji tçumêtêgozàri (信じ詰めてござり p 29)
 qenbô guengiü nî gozari (憲法 嚴重にござり p 68)
 qêga no comiô de gozàri (怪我の高名でござり p 42)
 vrexü gozari (嬉しゅうござり p 70)
 medetô gozari (めでとうござり p 70)

このように、「ござる」は、開合の符号やアクセントの表示の優先のためティルデのマークが付いていないもの・qêga no comiô de gozàri (怪我の高名でござり p 42)を除いて、ほかはすべて前の母音にティルデのマークが付いている。しかし、コリヤードの他の著書『懺悔録』には、「ござる」の前の母音にティルデのマークが施されているものや施されていないものが次のように両方見られる⁽¹⁴⁾。

- (前略) ni nàri maràxité gozàru, iùie, ni, mādà confesion vo mōfaiđēgozàru.
 (になりましてござる故に、まだコンヘションを申さいでござる。)
 (前略) dōco nî gozaru zo. (どこにござるぞ)
 (前略) vo mōxi âgue maraxenàn dē gozaru.
 (を申し上げませなんでござる。)
 (前略) maràxité gozarēdomo, (後略) (ましてござれども、)
 (前略) macàritē gozàru. (罷りいてござる。)
 (前略) no màie de gozàtta. (の前でござる)
 (前略) von auarēmi de gozàru. (御憐みでござる)

(前略) go sòntài vòncàtā de gozàru. (御尊体, 御方でござる。)

(前略) tçùini fono chòbĩ ga gazaraide, (後略) (終にその調備がござらいで,)

(前略) to mófu còto va gozaraide, (後略) (と申すことはござらいで,)

このように、『懺悔録』における「ござる」の前の母音にティルデのマークが付いているものと、付いていないものが両方見られる。これらをさらに分析すると、「ござる」の前に「が」「で」「は」などの助詞で連結された場合は、ティルデのマークが付かない傾向である。しかし、「ござる」の前に「動詞+て・で(接続助詞)」や助詞「に」で連結された場合は、必ずティルデのマークが付いている。これは著者コリヤードが、ティルデのマークを区別して使用したことが窺われる。

上の『羅西日対訳辞書』の用例は、「ござる」の前に「動詞+て」助詞「に」が連結されているからティルデのマークが施されたと思われる。しかし、『羅西日対訳辞書』の用例のうち、「qēga no comiō de gozàri」は、「ござる」の前に格助詞「で」が連結しているが、『懺悔録』と同じようにティルデのマークが付されていない⁽¹⁵⁾。

このように、コリヤードは著書『懺悔録』『羅西日対訳辞書』などで「ござる」のような、濁音の前の母音にティルデのマークを語によって使い分けをしていたと思われる。もう一つの可能性としては当時の発音に忠実であったと考えることも出来る。もしそうなら、当時の話者はすでにモーラに切って発音する習慣が出来つつあったことになる。

4. ゆ れ

前述の語と語尾の分析で調べたように『羅西日対訳辞書』には濁音の前の母音にティルデのマークが乱れがあるものの、ある程度ティルデのマークが個々の語彙や接辞によって分けられていることが分かった。しかし、『羅西日対訳辞書』の本文には同じ語がティルデのマークが付いているものと付いていないものが次のように見られる。

nāgare (流れ p 51)

cāva no nāgare (川の流れ p9)

namĩda vo nāgaxi (涙を流し p69)

fĩgaxi (東 p94)

cuchĩgòmori (口籠 p14)

tetno nengita taca xocūdai (鉄の捻ぢた高燭台 p17)

nagàre (流れ p51)

yāqinagàre (焼き流れ p73)

namida (涙 p 69)

nixi, figaxi (西, 東 p 94)

cúchigomori (口籠 p 14)

taca xocudai (高燭台 p 17)

「comori」の連濁形「gomori」の場合は、3-1の用例「docoro」の場合とはだいぶ異なる現象を見せている。「gomori」の前の母音にはティルデのマークが付いているものと付いていないものが同じ語に、しかも同じ音環境のなかで見られる。この現象は、「gomori」の単語自体のゆれによったものであろうか。

この用例は同じ単語にもかかわらず、濁音の前の母音に、一方はティルデのマークが施されているが、もう一方はティルデのマークが施されてない。しかも、「nagare (流れ p 51, p 51)」「namida (涙 p 69, p 69)」「figaxi (東 p 94 p 94)」「xocudai (燭台 p 17, p 17)」は、ティルデのマークが付されているものと付されていないもののそれぞれの語が、同じページですぐ近接してあらわれている。これは著者コリャードのティルデに対する思惑が示されているものであろう。

これは単なる誤りや見落としではなく、当時既に二通りの発音、つまりティルデの濁音前鼻音と濁音前鼻音を反映しない新しい発音が両方が存したことを意味するものであると思われる。言い換えれば、濁音前鼻音のゆれによった表記ではないかと思われる。

また、異なった語に「切れ」が続くとき、ティルデのマークが付くものと付かないものがある。この例は「ガ」行の例であり、すでにこの連語に関しては、ゆれがあったものと考えてよいのかも知れない。

fanaguire (鼻切れ p 85)

ivõguire (魚切れ p 101)

この用例を見ると、「鼻切れ」の「切れ」の前の母音には、ティルデのマークが付いていないが、「魚切れ」の「切れ」の前の母音には、ティルデのマークが付いている。前の例を合わせて考えると、すべて、連結された前の音を鼻音化することはなかったという証拠になる。

また、「こと(言)」の用例を掲げると次のようになる。

bùtcuiaqigòto (ぶつやき言 p 85)

nacãgòto (中言 p 120)

forãgòto (虚言 p 80)

「ぶつやき言」以外のほかのものにはすべてティルデのマークが付いている。このことは、ティルデが付く方が優勢であったと思われる。しかし、「ぶつやき言」はなぜティルデのマークが付されていないのか。これも「ゆれ」によるものではないかと思われる。もし、『羅西日対訳辞書』のコリャードの表記を正しいものとすれば、以上述べてきたようなゆれが当時すでに始まっていて、「g」の前でもゆれがあることは「d」の前にもあり、「b」「z」については少数を除いてはほとんど濁音前鼻音になっていなかったことになる。つまり、このティルデのマークが付いていないものの用例を見ると、「g」・「d」の前は少しあらわれるのに対して、「b」・「z」の前は多くあらわれている。つまり、この時代には、「ガ」行と「ダ」行にもすこし濁音前鼻音が少しゆれはじめていたのではないかと思われる。

5. おわりに

コリャード著『羅西日対訳辞書』の濁音前鼻音を施したと思われるティルデのマークを中心に統計的な調査をし、それぞれの語毎のティルデのマークを分析した。その結果、統計的な調査では、『羅西日対訳辞書』に記されているティルデのマークが、ロドリゲスの『日本大文典』の記述と異なり、「ガ」行・「ダ」行にもティルデが付されていないものが見られ、「バ」行にはティルデが付されているものが付されていないものより多く見られることが分かった。また、ロドリゲスは触れなかったが、「ザ」行にも少し見られることも分かった。さらに、ティルデのマークが分別なしに施されているもののように見られるものが、単語や接辞のような語彙のレベルで調べた結果、特定の語彙によってティルデのマークが付いていたり、付いてなかったりすることから、ティルデのマークの有無は、語や語尾によって決まるということも知ることができた。濁音の前にティルデが付されていないもののうち、「ガ」行と「ダ」行は少し見られるが、「バ」行や「ザ」行には多く見られる。この現象は、「ガ」行「ダ」行はゆれが始まっており、「バ」行と「ザ」行には段々消滅することを示すものであろう。また、同じ語彙で、同じ音環境のなかでもティルデの有無があることから、当時の濁音前鼻音の「ゆれ」があったことを示すものと思われる。このように、コリャード著『羅西日対訳辞書』のティルデのマークは、ある種の語にティルデには問題があるかも知れないが、全体としてはティルデを以て当時の濁音前鼻音を反映しており、かなり音声的な資料であると思われる。

本稿では、『羅西日対訳辞書』を中心にティルデのマークを調べたが、ほかのコリャードの著の版本『日本文典』・『懺悔録』や自筆本である稿本『西日辞書』のティルデのマークについては今後の課題にしたい。

注

- (注1) 『羅西日対訳辞書』は、島正三編 (1966) 『コリヤート 羅西日対訳辞書・同索引』(文化書房書店)と、大塚光信編 (1966) 『コリヤード羅西日辞典』(臨川書店)の両方を使用した。以下に示す用例のページは島正三編に従った。また、コリヤードの自筆本『西日辞書』は、大塚光信・小島幸枝編『コリヤード自筆 西日辞書』(臨川書店)を参照した。以下での『懺悔録』は、大塚光信 (1985) 『コリヤード ざんげろく私注』を参照した。
- (注2) 亀井孝 (1967) 「コリアドの辞書に方言ありや」(『国語学』第69集) 参照。
- (注3) 中世の日本語における濁音の前の鼻音的要素については、鼻濁音、鼻母音、入りわたり音などの説があるが、今は、この現象を「濁音前鼻音」と呼ぶことにする。
- (注4) 土井忠生訳 (1955) 『ロドリゲス 日本大文典』(三省堂) p 637参照。
- (注5) 橋本進吉 (1932) 「国語に於ける鼻母音」(『方言』2ノ1, 橋本進吉博士著作集第四冊『国語音韻の研究』所収) 参照。濁音前鼻音の存在時期としては、浜田敦 (1952) 「撥音と濁音との相関性の問題」によると、『鶴林玉露』に濁音の前に鼻音を伴う漢字の表記から、少なくとも『鶴林玉露』の編纂時期である1252年頃まで遡り得るとしている。その他、高橋正郎 (1939) 「濁音前に現れる撥音便と鼻音 (上・下)」(『國學院雑誌』第536号539号), 岡本勳 (1969) 「バ・ダ行音の前の鼻音的要素は上代中古に遡り得るか —— 漢音に於ける明母泥母の音価よりの推定 ——」(『国語国文』38ノ5) などがある。
- (注6) この濁音前鼻音について朝山信彌 (1937) 「鶴林玉露の「黄榜」などについて」(『国語国文』第7巻第12号) は、13世紀中国の南宗の羅大経の著『鶴林玉露』に記載されている「黄」字の鼻音尾が後続する「榜」字の頭子音を有声化して読ませるためのものであると指摘している。これに対して浜田敦 (1952) 「撥音と濁音との相関性の問題 —— 古代語における濁子音の音価 ——」(『国語国文』21ノ3 『日本語の史的研究』) に所収) は、中国資料や朝鮮資料の用例を掲げながら、当時の日本語の濁音の前に鼻音的な要素が存在していた為の表記であると説明している。浜田氏の言われるように『羅西日対訳辞書』のティルデのマーク「~」や『捷解新語』に記されている濁音の前に記されている「n」「m」「ŋ」などの表記が行毎によって現れることが異なり、しかも『捷解新語』の原刊本には濁音の前に「n」「m」「ŋ」の鼻音的要素の表記が多く現れるのに対して、改修本・重刊改修本にはそれぞれ原刊本と比べてひくい比率を占めている。『捷解新語』のこの現象は、濁音の前の鼻音的要素の変化を示したものと思われる。
- (注7) 大塚高信訳 (1934) 『コリヤード著日本語文典』(坂口書店) 参照。
- (注8) 濁音の前の母音でない母音にティルデのマークが付いているものも次のように見られる。

例) yāxinai (養い) (p 8)

chibufa ūo fucume (乳房を含め) (p 69)

その他、これに属するものとしては、濁音の前の鼻音的要素を示す「n」の前の母音にティルデのマークが付いているもの「tacafūnda (高札)」(p 40) が一例、撥音の前の母音にティルデが付いても「qīncan (金柑)」(p 17), 「zanguēn (讒言)」(p 139), 「dai fēnqi (大偏気)」(p 76) の3例が見られる。「tacafūnda (高札)」の場合、濁音の前の鼻音的要素「n」であり、unde (腕 p 15), inango (鯉 p 75), quenanquena (けなげな p 119), vnanngui (鰻 p 151) のようにティルデが付かないはずである。おそらく、この例は間違いの例であろう。

また、撥音の前にティルデのマークが付されているのは、当時の濁音前鼻音ティルデに近い音

であったのでそれに引かれたものではないかと想像される。この事実を逆に考えると、ティルデのマークは、鼻濁音に近いものではなかったかと思われる。

- (注9) 子音「g」には、「āgi (味)」「mimigicai (耳近い)」のような「ダ」行の「ヂ」のものも含まれている。ティルデが付されているものには27例、ティルデが付されていないものには24例がそれぞれ含まれている。
- (注10) ティルデが付されている母音については次に示すようになるが、ティルデは母音の音声の特徴に基づいて付けられるとは考えにくいことがこの表から知られる。

母音	a	i	u	e	o
字数	355	306	164	90	241

- (注11) また、コリャードの著書には自筆稿本『西日辞書』があるが、そこに見られるティルデのマークは、濁音の前の母音の上に示した『羅西日対訳辞書』『日本文典』『懺悔録』のそれと種類が異なっていてほとんど「b」「d」「g」「z」「j」などの子音の上にティルデのマークが付されている。
- (注12) 『捷解新語』には「ほどに」を原刊本には殆ど濁音の前の鼻音を記したと思われる表記「hondoni」で示されており、改修本や重刊改修本には鼻音の表記でない「hodoni」のように示されている。この現象と『羅西日対訳辞書』と関連があるように思われる。おそらく、『捷解新語』の原刊本の「ほどに」は濁音前鼻音が保たれていたが、時代が下るにつれてそれがなくなり、改修本の時代になると、すでになくなったので、原刊本のような濁音前鼻音を反映しなくなったと推定される。
- (注13) 濁音の前の母音の鼻音的要素は江戸時代に入って消滅するが、その原因については、柳田征司(1985)「音韻史における中世」(『日本語学』5月号)によると、「(前略)モーラ言語期に入ると、一モーラずつ切って発音することになったため、次の濁音節との密着度の高い鼻母音は衰滅することになった」と推定している。
- (注14) 『懺悔録』の日本語訳は、大塚光信校注(1986)『コリャード懺悔録』(岩波文庫)参照。
- (注15) 『捷解新語』には原刊本には「ござる」は濁音前鼻音の表示がほとんど示されていない。それは、時代が下るにつれて一モーラずつ切って発音することになったため、次の濁音前鼻音の要素が衰退することになったからであろう。

(韓国 慶州大学校専任講師)